

2021年1月3日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

出エジプト記 29：45～46
ルカによる福音書 11：24～28
「家に住むのは誰？」

<イエスさまと悪霊の力関係>

ルカによる福音書の11章では、まず初めにイエスさまが弟子たちに「主の祈り」を教えて下さいました。

神の御子であり、救い主であるイエスさまは、ご自分の十字架の死と復活の御業によって、弟子たち、わたしたちを罪から救い出して下さいます。わたしたちは罪の奴隷から、神さまの子どもとされます。天地を造られた神さまに、「父よ」と呼びかける親しい関係が与えられます。

だから、イエスさまはわたしたちが祈る時には、まず神さまを「父よ」と親しく呼ぶように、教えて下さいました。そして、愛を持ってわたしたちの祈りに耳を傾け、恵みを豊かに与えたいと望んで下さっている父なる神さまに、信頼して、安心して祈りなさい、と教えて下さったのです。

この「主の祈り」は、イエスさまが神さまの独り子だからこそ、そして、神さまに遣わされたわたしたちの救い主だからこそ、教えて下さった祈りです。

しかし、その後、イエスさまがある人から悪霊を追い出しておられると、それを見た群衆の中に、文句を言ったり、試そうとしていちゃもんをつける人が出て来ました。

ある人は、イエスさまは、悪霊の仲間なのではないか。イエスさまは、神の力ではなくて、悪霊の親玉のベルゼブルの力を使って、下っ端の悪霊を追い出しているだけではないか、と疑いました。

これに対してイエスさまは、その彼らの言い分が矛盾していることを指摘された上で、ご自分は「神の指」で、一天地を造られ、命を生かし、すべてを支配なさる神の力で、悪霊を追い出しているのだ、ということ語られたのです。

さらに、前回のところでイエスさまがお語りになったのは、悪霊は、自分の屋敷を守っている、武装した強い人のようであり、人間は、その屋敷の中で安全に守られている持ち物である、ということです。つまり、人間は、悪霊にしっかりとガードされている状態だ、ということです。強い武装した悪霊にしっかりと守られている人間、支配されている人間は、自分では抵抗することも、その支配から抜け出すことも、どうすることも出来ません。

しかし、もっと強い者、つまり、神の力をもつイエスさまが、この悪霊を襲って、わたしたちを悪霊から分捕り品として奪い取って下さる。悪霊に支配されて、捕らわれていたわたしたちを、イエスさまが神の力で悪霊に打ち勝って、ご自分のものとして下さるのだ。その

ように語って下さったのです。

つまり、イエスさまは悪霊やサタンに打ち勝つ、神の力をお持ちであること。悪霊やサタンの強い力に対して、何の勝ち目もない、何の力もないわたしたちを、イエスさまが、もっと強い神の力でご自分のものとして下さり、神さまのご支配の中に置いて下さる、ということが語られたのです。

<わたしたちという家>

さて、今日のところは、そうして悪霊を追い出して頂いた後のわたしたちの状態のことが、イエスさまによって語られています。

まず最初に、24 節で「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。」とあります。

悪霊、つまり汚れた霊は、わたしたちを支配していましたが、そこから確かに出て行った。そして、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからないのだ、と言います。

砂漠は、古来から悪霊や汚れた霊の居場所とされてきました。人間から出て行った汚れた霊が、自分の本来の居場所に行こうとした。しかし、そこに休まる場所がない。それで、なんと汚れた霊は「出て来たわが家に戻ろう」と言うのです。人間は、汚れた霊にとって居心地の良い「わが家」となってしまうている。本来の、汚れた霊の居場所である砂漠よりも、彼らが休まる場所、くつろげる場所となっている、ということです。これは、わたしたちに対する、イエスさまの痛烈な皮肉なのかも知れません。

そして、汚れた霊が戻ってみると、「家は掃除をして、整えられていた」とあります。

人間は、汚れた霊が出て行って、悪霊の支配から解放され、ほっとして、自分の家、自分の心と言ってもいいかも知れませんが、それをちゃんと掃除して、整えたのです。闇の力の支配によって、掻き乱され、翻弄され、ぐちゃぐちゃになってしまった心を、きれいにして、整理した。新たな気持ちで一からやり直そう。もうこんな苦しみに遭わないようにしよう。二度と悪霊に支配されないようにしよう。そんな風に固く決意したのかも知れません。

「整えられていた」という言葉は「飾られていた」という意味でもあります。自分の決心や、決意などで、家を飾った。抱負や目標を立てて、覚悟を決めて、自分の身を固めようとした、というところでしょうか。

汚れた霊がいったん出て行った人間のところに戻ってみると、人間の心の家は、そうやって掃除され、整えられていたのです。

さてここで、これと同じ話が、マタイによる福音書 12：43～45 にも書かれているのですが、そこでは、汚れた霊が戻ってみると、「空き家になっており、掃除をして、整えられていた。」とあります。ルカによる福音書では、この「空き家になっており」という言葉が省略されています。

そして、汚れた霊は出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く、といわれているのです。

わたしたちの心が、マタイ福音書にあるように「空き家」であったのなら、汚れた霊にとっては、どんなにきれいになっていても、どんなに整えられていても、戻って来て入り込むことは、確かに簡単だったに違いありません。

一方で、ルカによる福音書が「空き家」であったことを省いているのは、もしかしたら、わたしたちがこのように思うからではないでしょうか。「いや、わたしの心は『空き家』などではない。心を支配していた汚れた霊が出て行ったなら、そこには本来のわたし自身が出て、今はわたしがわたしの家を支配している。わたしは、自分自身を把握し、自分で自分をコントロールして、治めることが出来ている。わたしの心では、わたしの家では、わたし自身が家の主（あるじ）として、ちゃんと自分の家を守っている。」

確かにそうかも知れません。わたしの心は、わたしのものだ。さっきまで悪霊の力に負けて、悪霊がわたしの主人となり、わたしを支配していたが、その支配がなくなったのなら、またわたしは、わたしのものだ。自分が自分の人生の支配者だ、と。

しかし。残念なことに、汚れた霊にとっては、わたしが自分の家の主人として家を守っていたとしても、それは「空き家」と何の変わりもない、ということなのです。

前回の聖書の箇所では、イエスさまは、武装して屋敷を守っている強い人を悪霊にたとえ、わたしたちは、そこでしっかりと守られ、完全に安全な状態にある持ち物にたとえられていました。悪霊のもとで、しっかりガードされ、守られているわたしたち。つまり、わたしたちには悪霊に刃向かう力も、逆らう力も、ましてや支配に打ち勝つ力など、全くないと言われているのです。

そんな弱いわたしたちが、自分が自分の家の主（あるじ）だ、と言って家を守っていたとしても、汚れた霊にとっては、守りなんか無いも同然であり、空き家に入るのと同じくらい簡単なことなのです。

さらに、今日の聖書では、汚れた霊は、自分より悪い他の七つの霊も連れてくると言われています。「七」は完全数でもありますから、もう最高に悪い、手の付けようがないような霊たちが、その家を占領してしまう、ということでしょう。

人間にはどうしようもない状況が、さらに際立っています。家が空き家なら、あるいは自分が主人と思っているなら、結局は、再び汚れた霊に支配されて、また神さまから離れて、前の状態よりもずっと悪くなってしまいます。せっかく汚れた霊が出て行ったのに、再び支配され、闇の力に捕らわれ、前よりももっと身動き出来なくなってしまいます。イエスさまは、このように語られたのです。

<主人はイエスさま>

イエスさまがこのお話を通して教えようとしておられることは、わたしたちは、汚れた霊、闇の力から解放されたなら、直ちに救って下さったイエスさまを、自分の家の主人として迎え入れなければならない、ということです。苦しみから解放し、悪に勝利し、救って下さっ

たイエスさまに、これからも守ってもらわなければならない、ということです。

悪霊が出て行った自分の心の内が、空き家であっても、わたし自身が主人であっても、戻ってくる汚れた霊から、自分の家を守ることは出来ないのです。闇の力に二度と支配されないためには、この家に、わたしの心に、神の御子イエスさまが家の主人として宿り、共にいて下さらなければならないのです。

わたしの家に、悪霊より弱いわたしが主人として居たって、強い悪霊に戻って来られたらどうにもなりません。わたしたちは、自分が思っているより、ずっと弱いのです。恵みに与り、救われ、喜んでいても、何かあるとすぐ神さまの恵みを疑ってしまいます。自分の持っているものにしがみつき、自分の力で何とかしようとして、結局どうにもならなくなり、最後には信念も覚悟も、簡単に吹き飛ばしてしまいます。悪霊の支配に、すぐに捕らえられてしまうのです。

しかし、わたしより強い悪霊に対して、もっと強い神の力で、わたしたちを悪霊の支配の下から奪い取り、悪霊に打ち勝って下さるイエスさまが、わたしの家の主人となって下さるなら。わたしを支配して下さるなら。今も、これからも、このイエスさまが、わたしを守って下さるのです。

わたしたちは、他の誰かを主人として、自分が僕（しもべ）になって生きて行く、と考えた時、僕というのは自由がなくて、主人の命令が絶対で、自分というものが無くなってしまいうように感じるかも知れません。

しかし、イエスさまは、わたしたちを奴隷のようにして、自由を奪う主人ではありません。むしろ、僕のために御自分の命を投げ捨てて、僕を救って下さる主人なのです。御自分が僕のようになって、わたしたちの重荷を背負い、罪をかぶり、死を身代わりになって引き受けて下さる主人なのです。御自分が苦しみと死を引き受けることで、わたしたちをまことに自由にし、生かして下さる。そのことを喜びとして下さる主人なのです。

神の御子イエスさまは、わたしたちを闇の支配から取り戻し、悪霊に完全に打ち勝つために、まことの人となり、辱めを受け、十字架の上で苦しみ、死なれました。わたしたちを取り戻すために、わたしたちを愛するゆえに、そこまでして下さる主人なのです。

この主人よってこそ、わたしたちは罪と死から解放され、悪霊の支配から解放され、本当の自由が与えられるのです。イエスさまを主人として従うことによってこそ、世の他の支配から解放されて、本当に自分らしい生き方が出来るのです。神さまに造られた者として、神さまに向かって、歩むべき命を生きる、本当の自分の人生を、生きることが出来るのです。

<幸いなのは>

さて、27 節では、ここまでのイエスさまの悪霊を追い出す奇跡の業を見て、群衆の中の女の人が、このように言った、とあります。「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」素晴らしい奇跡の業を行なうイエスさまを産んだ、母マリアを讃える言葉です。

しかし、イエスさまは言われました。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」

確かに、神さまの御業に用いられ、救い主イエスさまを胎に宿したマリアは、祝福された人であり、恵まれた、幸いな人であることに違いありません。

しかし、イエスさまは言われるのです。むしろ、幸いなのは、もっと、本当に幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守る人である。

「神の言葉」とは、わたしたちを愛して下さる神さまの言葉であり、イエスさまの救いの恵みのことです。イエスさま御自身のことです。このイエスさまと出会い、救いの恵みを聞き、それを守る人。「守る」というのは、保つとか、しっかり持つ、という意味の言葉です。

つまりそれは、わたしたちが神さまから与えられた救い主イエスさまを受け入れ、これからずっと、この方と共に歩いていく、ということです。イエスさまを主人として自分の内に迎え、イエスさまに従って歩いていくということです。

イエスさまは、それこそ、幸いだ、と言われます。あなたは、わたしに従いなさい。わたしと共にいなさい。わたしの救いを受け入れなさい。わたしがあなたたちを、神の愛と恵みで支配し、神の力で守り導いていくから。あなたは、あなた自身をわたしに委ねなさい。わたしの支配の下に来て、そこに留まりなさい。それこそ、まことの幸いだ。幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守る人である。

イエスさまはそう言って、わたしたちをイエスさまに従う人生へと招いて下さっているのです。いや、むしろ、御自分からわたしたちの近くまで来て下さり、寄り添って下さり、救いを差し出して、その命を差し出して、ご自分のすべてを、わたしたちに与えようとして下さっているのです。

ですからわたしたちは、弱い自分を認めて、自分の家を守ることも出来ない、すぐに悪霊に負けてしまう罪深い者であることを認めて、素直に自分をイエスさまにお委ねしたいのです。イエスさまにこそ宿っていただき、わたしの主人になっていただき、この方の恵みの中で、この方にこそ守られて、世の終わりの日まで歩む者になりたいのです。

なお疑い深い、罪深い、弱いわたしたちは、礼拝の御言葉を聞き続け、聖餐の恵みに与り続け、何度でも救いの恵みを確かにされなければなりません。イエスさまと結ばれていることを確かにされ、神さまに愛されていることを確かにされ、終わりの日の復活の希望を確かにされ、自分が神さまの恵みに中にいつも置かれていることを。自分が悪霊の支配ではなく、イエスさまの支配のもとにいることを、しっかりと見つめ続けたいのです。

新しい一年も、わたしたちは救い主イエスさまを主人として心の内にお迎えし、この方に守られて、この方の恵みに留まって、神の言葉を守る人とされて、まことの幸いの中を歩んで行きたいと願います。

【お祈り】

わたしたちを愛して下さる天の父なる神さま

御子イエスさまを遣わして下さり、わたしたちを悪霊から、闇の力から、罪の中から、神の力によって救い出して下さり、神のご支配の中へ招き入れて下さったことを、心から感謝いたします。

それなのにわたしたちは、自分の力にうぬぼれたり、自信がないくせに自分の力に依り頼もうとしたり、頑なに自分をイエスさまの御手に委ねようとしないう者です。

どうか、十字架の死によって、そして復活によって、わたしたちをご自分のものとして下さったイエスさまに、わたしのすべてをお委ねすることが出来ますように。わたしたちの頑なな心を打ち砕いて下さり、イエスさまが心の内に主人として宿って下さり、その力強い守りの中を歩む者とならせて下さい。

御言葉によって、聖礼典によって、祈りによって、いつも、あなたの愛を、イエスさまの救いを、聖霊の導きを、確かに覚えさせて下さい。そして、神の言葉を守る人、イエスさまの恵みのもとに留まって、イエスさまに従って歩む者とならせて下さい。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン